

文化遺産ニュース

Cultural Heritage News
from NARA

Vol.
32

March 2020

◎ 個別テーマ研修(キルギス・タジキスタン・ウズベキスタン)	1
◎ 集団研修	2
◎ 国際会議「文化遺産保護と地域コミュニティ」	3
◎ 文化遺産 ワークショップ(カンボジア)	4
◎ イクロム (ICCROM) 総会2019	5
◎ 世界遺産教室	5/6
◎ 文化遺産セミナー「日本最大の円墳 富雄丸山古墳の魅力を探る」	6
開館100年を迎えた カンボジア国立博物館	裏表紙



個別テーマ 研修

2019年7月24日から8月7日まで、キルギス・タジキスタン・ウズベキスタンの国立博物館から6名の研修生を招き、「博物館収蔵品の記録と保存活用」をテーマに実施しました。



臨地研修(元興寺文化財研究所)

博物館収蔵品に関する研修は、2015年に開始し5回目になります。これまで、東南アジア・南アジア・大洋州・西アジアから研修生を迎えましたが、今回は中央アジアからです。

この研修の特徴は、参加者の要望に沿ったオーダーメイドのカリキュラム編成ができることと、条件次第では英語以外の言語でも開催できることです。

今回の中身は、①展示手法、②収蔵品(土器と金属器)の保存修復、③記録法(3D・写真)、④教育普及活動と、多岐にわたり盛り沢山でした。また、中央アジアでは英語を話す人が少なく、今回は久しぶりに、ロシア語で開催しました。



写真撮影実習(奈良文化財研究所)

連日35度超の記録的猛暑の中で、参加者の皆さん、実習主体の日程を精力的にこなしました。地元奈良のメディアも関心を寄せ、研修生たちは期間中に何度か取材も受けました。キルギス国立博物館の学芸員・ヌリザットさんは、「奈良で新たなエネルギーと知識を得て、とても刺激になっている。これからの仕事に必ず生きてくる」と応じていました。

当のヌリザットさんは妊娠7か月目での参加。おなかの赤ちゃんと二緒の奮闘でした。帰国後の10月に、元気な女の子が生まれたと知らせがありました。奈良での研修の思い出など、いつか話してあげることでしょう。



金属製品の保存修復実習(元興寺文化財研究所)

研修生からのメッセージ



ハイルロさん
(キルギス)

多くのことを学んだ。日本で発見した新たな可能性を、自国での仕事に取り入れていきたい。博物館の修復室や写真室の改善を活かし、20年も替わっていない展示を3〜5年で一新させたい。



マヌチェフルさん
(タジキスタン)

平城宮跡や資料館では奈良の美しい過去を感じ、写真とデジタル保存の授業では将来の指針を得ることができた。研修を通じて自国博物館の課題がよく分かったので、成果を改善に役立てたい。



ディラフルツさん
(ウズベキスタン)

豊富な「子供向け展示」や「体験コーナー」に触れ、とても刺激になった。費用を抑えてすぐにも活用できそうなアイデアをたくさん得ることができたので、帰国したら早速試みたいと思う。

カリキュラム(概要)

講義

「博物館収蔵品の展示環境と展示手法」
「博物館の教育普及活動」

実習

「考古遺物の展示技法」「収蔵品の保存修復(土器・金属製品)」「収蔵品の記録(3D技術)の活用・写真記録」

臨地研修

(奈良市)奈良文化財研究所と平城宮跡資料館・平城宮跡歴史公園と平城宮いごない館・元興寺文化財研究所奈良国立博物館(大阪府吹田市)国立民族学博物館(京都市)京都文化博物館

報告・討議

研修生各国の「博物館の実情と課題」についての報告と意見交換



臨地研修(平城宮第一次大極殿院南門 復原整備工事現場)

集団研修

2019年9月4日から10月3日まで、アジア太平洋地域の15か国から16名の研修生を招き、「木造建造物の保存と修復」をテーマに実施しました



破損調査実習(奈良市 天満神社本殿)

集団研修は、ACCU奈良事務所が行う人材養成の中核事業です。「木造建造物」と「考古遺跡」の2種類の研修テーマを、隔年で交互に実施しており、昨年(2019年)は木造建造物の年でした。

16名の研修生は、政府機関や研究所などで、自国の文化財保護に携わる若者たち(平均年齢33歳)で、歴史建造物の保存修復現場で活躍中です。

この研修は、実技実習と実際に現場を訪れる臨地研修が多いことが大きな特色ですが、今回は実習に例年以上の時間をかけて充実を図りました。

まず、旧田中家住宅(奈良市五条町)を教材に、建物平面・立面のスケッチと実測から始め、写真記録の技も磨きました。その後、天満神社(奈良市



臨地研修(高山市 吉島家住宅)

七条丁目)に現場を遷して、破損調査と修理方針策定の実習と続け、最後に、防災など管理計画の策定を試みました。調査から保存修復計画そして管理計画の立て方に至るまで二連の過程を、実際の手作業を通じて習得する貴重な体験になりました。

加えて、各自の実習成果を全員で意見交換することで、新たな発見もありました。2週間の実習は長いかも知れないと当初は心配でしたが、充実感があつて良かったと好評でした。

臨地研修では、岐阜・長野両県の伝統的建造物群保存地区を訪ね、町並み保存と地域社会の関わりについて、地元の方のお話しをじっくりと伺いました。帰国後の仕事に役立ちそうな情報をたくさん得て、充実した旅となりました。

報告・討議
研修生各国の「木造建造物・町並み保存の実情と課題」「危機管理の実情と課題」についての報告と意見交換

臨地研修
(奈良市)旧田中家住宅・天満神社・薬師寺唐招提寺・東大寺・平城宮第一次大極殿院南門復原工事現場／(兵庫県神戸市)竹中大工道具館／(岐阜県高山市)三町伝建地区／(岐阜県白川村)荻町伝建地区／(長野県塩尻市)奈良井伝建地区・木曾平沢伝建地区

実習
「木造建造物の記録法(スケッチ実測・写真)」「破損調査と修理方針の策定」「危機管理計画の策定」

講義
「アジア太平洋地域における文化遺産保護の実情と課題」「日本の文化財保護制度と国際憲章」「日本における木造建造物の保存と修復」「日本の木造建造物の構造」「木造建造物の記録法」「建造物修復事業の体制と工事計画」「アジアにおける文化遺産の危機管理」「町並み保存と地域コミュニティ」など

カリキュラム(概要)

参加国
アフガニスタン・ブータン・カンボジア(2名)・中国・インド・インドネシア・イラン・ラオス・ネパール・ニュージーランド・ウイリピン・スリランカ・タイ・ラオス・ベトナム



写真撮影実習(奈良市 旧田中家住宅)

国際会議

2019年10月26日から31日まで、文化遺産保護に携わるアジア太平洋地域の実務担当者が奈良に集まり、「文化遺産保護と地域コミュニティ」をテーマに意見を交わしました。



総合討議の様子



臨地研修(大田市大森町 中村プレイス株式会社)

文化遺産の保護と地域社会の関わりについて考える会議は、前年に続き2回目です。今回は町並み保存の分野を取り上げましたが、今回は、多様な文化遺産の持続可能な保存活用方法について意見を交わしました。

はじめは、日本人講師の基調講演です。西和彦さん(東京文化財研究所)の「国際憲章と世界の動向」、清水重敦さん(京都工芸繊維大学)の「日本各地の特色ある事例」、大門克典さん(鳥根県大田市教育委員会)の「世界遺産石見銀山における地域コミュニティと保存活用」というプログラムでした。

次に、参加各国の実情と課題についての事例報告と意見交換です。①遺産保護の主体者は地域住民なのか、行政や専門家なのか。②地域住民だとした



臨地研修(大田市大森町 暮らす宿・他郷阿部家)

ら、行政や専門家が果たすべき役割は何か。ということが議論されました。

こうした意見交換を踏まえ、会議参加者は、大門さんはじめ大田市(石見銀山課)の皆さんの案内で石見銀山を訪れました。世界遺産の石見銀山には鉾山跡・鉾山町など多様な文化遺産があります。訪問先で遺産の保存活用の実情を見て学ぶことはもちろん大切ですが、あわせて地域の取り組みについて、多くの住民の皆さんからお話しが伺えたことも何よりの収穫でした。

なかでも一同が感心したことは、過度な観光施策に依存しないまちづくりが、新たに移住してくる人たちの魅力となっていることや、地元起業の会社が新たな雇用に貢献して町の活性化に貢献している実情のお話しでした。

人口減少が続く大田市でも、石見銀山地区(大森町)のみ、この数年間は現状維持とのこと。最も出生率が高い地域だと聞いて、また驚きでした。

一同ごぞつて、①地域の遺産は地域で守る。その主体は住民である。②行政や専門家は良きアドバイザー・サポーターであれ。ということ、あらためて実感した会議でした。



参加者の皆さん

参加者の皆さん

ペマ(ブータン)
 ソー・ソクンテリー(カンボジア)
 刘真(リウ・ツェン)(中国)
 ジョニー・ウォン(インドネシア)
 ドミトリー・ウオヤン(カザフスタン)
 チョー・ミョー・ウイン(ミャンマー)
 パシユバティ・ネウパネ(ネパール)
 カルミンダ・アレヴァロ(フィリピン)
 プラサナ・ラタヤナケ(スリランカ)
 グエン・カイン・キエン(ベトナム)
 上野邦一(奈良女子大学)
 西和彦(東京文化財研究所)
 清水重敦(京都工芸繊維大学)
 大門克典(鳥根県大田市教育委員会)
 森本晋(ACCU奈良事務所)

文化遺産 ワークショップ

2019年11月18日から23日まで、
カンボジア王国で実施しました。



参加者の皆さん(カンボジア国立博物館)

AACCU奈良事務所が海外の現地で行うワークショップを始めたのは2007年のこと。カンボジアのシエムリアップ(アンコール遺跡見学の拠点の町)が最初の開催地でした(テーマは「考古遺物の記録法」)。今回は同国で2回目の開催ですが、会場は首都プノンペン国立博物館。文化芸術省文化遺産局との共催で、同局が希望した「博物館収蔵文化財の写真撮影技法」がテーマです。

首都の本局と国内8州の地方文化芸術局から、18名が参加しました。

普段は特別展示室に使用している一室を、仮設の教室兼スタジオにして、研修開始です。講師は、奈良文化財研究所の中村一郎さん・佐藤由似さんと、文化財写真家の杉本和樹さんです。プログラム前半は、文化財写真の基礎知識の習得です。カメラの設定・操作法、



写真撮影実習(カンボジア国立博物館)

撮影台の設置法、被写体のセッティング法、ライティングという一連の手順を、実演と講義でみっちり学びました。

その上で各自が、後半の実技実習に臨みます。教材に利用する文化財は、参加者の希望で選びましたが、土器・陶磁器・金属器・漆器・織物・衣装や彫刻・碑文など、多彩でした。

なかでも、大型の彫刻・碑文は常設展示室から容易に動かすことができません。どうすれば、うまく撮ることができるかが、参加者多くの関心事でした。石像の表情が影でつぶれてしまふ、碑文の文字をもっと鮮明に撮りたい、といった困りごとがあるようです。

そこで、入館者が少ない夕方に、撮影・照明・背景の器材を持ち込んで、展示室での撮影を試みました。カメラ位置と照明の工夫で、被写体の表情は



写真撮影実習(カンボジア国立博物館)

じめ質感や立体感も表現できること、肉眼では読みにくい碑文の文字も、照明の陰影で読みやすく撮影できることが実感でき、貴重な経験になりました。閉館を過ぎても熱心に取り組む姿があつて、守衛さんには気の毒でしたが、嬉しい場面でした。

プログラム終了の直後には早くも、アンコール(遺跡の名前ではありません)開催の希望が寄せられるなど、私たちも確かな手応えを感じた一週間でした。



写真撮影実習(カンボジア国立博物館)

カリキュラム

講義

「文化財写真の基礎知識」「写真システムとカメラの基礎知識」「カメラの設定と操作」「撮影データの処理と保管」

実演講義

「撮影セットの基礎とセッティング」「大型・平面等さまざまな撮影技術」

実習

「室内での撮影・セッティング」「動かせない大型被写体の撮影」「さまざまな文化財の撮影」

質疑応答

「文化財写真撮影での困りごと」

イクロム総会 2019

2019年10月30日から31日まで、ローマにあるイクロム (ICCROM / 文化財保存修復研究国際センター) の総会に出席しました。



木造建造物の研修に関する意見交換(イクロム本部)

イクロムは、ACCUCU奈良事務所が行う各種事業、特に集団研修と国際会議の開催に際して、大切なパートナーとなっている国際的な政府間機関です。日本からも、文化庁が専門の職員を派遣しています。

イクロムの本部建物は手狭なため、総会の会場は例年と同じくFAO(国際連合食糧農業機関)という国連機関の建物でした。近くには、コロッセオやカラカラ浴場跡といった有名なローマ時代の遺跡がたくさんあり、FAOの玄関にも建物工事の際に出土した遺物が展示されています。ただ、地下鉄駅に隣接していることもあって、門の前には警備車両と武装警官が常駐しており、いささか物々しい雰囲気でした。

総会は2年に1回開催され、今回が第31回目にあたりです。今までは3日間行われていましたが、今回から2日間に圧縮されることになりました。事業と予算についての報告と計画案が討議の中心です。自然災害や軍事衝突による文化財の被害が拡大していることもあって、アラブ諸国を担当するシヤルジャ事務所による活動の比重が大きくなってきているようです。

総会では理事の選挙も行われ、日本から東京文化財研究所の西和彦さんが新理事に選出されました。2日目にACCUCUも発言の機会を得て、日本で行う研修や国際会議、海外で行うワークショップについて紹介し、イクロムに対す

る謝意を述べました。

イクロムが共催する研修事業の中に、木造建造物に関するものが3件あります。ノルウェー、ロシアそしてACCUCUの研修です。今回はじめて各担当者が集まり、それぞれの研修の特徴を紹介しあう機会を設けました。研修対象者や費用負担などにも違いがあることがわかりました。相互に協力できる点を探るとともに、研修希望者が各国の研修の違いを理解しやすい、わかりやすい体系とするために、イクロムの関係者とともに意見交換しました。



ACCUCU奈良(森本所長)の発言の様子

世界遺産 教室

高校生1,286名が受講しました。

奈良県内の高校にかけて開催する出前授業の世界遺産教室ですが、昨年は11校を巡りました。事業開始から15年が経ち、今や、受講生八千名を超える、看板事業に成長しました。

この教室では、世界遺産の意義や仕組みを、多彩な映像や「おもしろゼミナール」と銘打ったクイズ形式の授業などを通じて学びますが、15年の間に、登録遺産の中身は随分と多様になってきました。歴史建造物が主体の登録が長年続いた後、新たに文化的景観や産業遺産といった、あまり登録がなかった分野が俄然注目されました。日本でも石見銀山・富士山・富岡製糸場・明治の産業革命遺産などが登録されてきたのはご存じのとおりです。

長年この教室の講師を務めてくださっているのは、フリーアナウンサーの久保美智代さんと、通訳の小野以秩子さん。お二人とも、こうした世界遺産を



村瀬 陸さんの講演の様子

文化遺産 国際セミナー

2020年1月18日に、奈良市学園前ホールで、「日本最大の円墳 富雄丸山古墳の魅力を探る」をテーマに開催し、300名の皆さんが参加しました。

昨年7月に、大阪府の百舌鳥・古市古墳群が世界遺産になりました。日本の古墳文化が広く海外にも知られる好機となり、最大の前方後円墳である大仙（仁徳天皇陵）古墳は、あらためて国内外の注目を集めました。かたや奈良でも、富雄丸山古墳が日本最大の円墳であることが発掘調査でわかり、大きな話題になりました。

そこで昨今の古墳ブームに便乗して今回は、調査成果から見えてきた富雄丸山古墳の魅力を、専門の先生方に語ってもらいました。

前半は、3本の講演です。村瀬陸さん（奈良市教育委員会）の「富雄丸山古墳の発掘調査成果」、寺沢知子さん（神戸女子大学）の「富雄丸山古墳の被葬者像」、和田晴吾さん（兵庫県立考古博物館）の「日本の古墳について」というラインナップでした。

後半は、鐘方正樹さん（奈良市教育委員会）の司会で、座談会です。会場の皆さんがとりわけ関心を寄せたのは、墓の主は誰かということでした。

寺沢さんは、大和の王権に敵対する豪族の長を想定します。例えば、東征中の神武天皇が生駒を超えて大和に入ろうとした時、これに抵抗した登美能那賀須泥毘古（とみのながすねびこ）のような人物です。

かたや和田さんは、4世紀中頃になって大和盆地の北部に、五社神（神功皇后陵）古墳・佐紀陵山（日葉酢媛陵）古墳など佐紀古墳群の西側のグループを造営した大王たちと同盟関係を結ぶ、地域の有力豪族の墓だとみまします。

はたして敵か味方か。興味の尽きないお話しに、会場の皆さん、古墳時代の奈良に思いをはせながら、楽しいひと時を過ごされたようです。

ACCU 奈良 文化遺産セミナー2019

日本最大の円墳 富雄丸山古墳の魅力を探る

講演1 「富雄丸山古墳の発掘調査成果」
村瀬 陸（奈良市教育委員会文化財課 主事）

講演2 「富雄丸山古墳の被葬者像」
寺沢 知子（神戸女子大学 教授）

講演3 「日本の古墳について」
和田 晴吾（兵庫県立考古博物館 館長）

二〇二〇年一月十八日（土）
十二時～十六時

学園前ホール
奈良市学園前二丁目一番五号 西部会館三階

申し込み期
定員300名
参加費無料
手話通訳あり

主催：（公財）ユネスコ・アジア文化センター文化遺産保護協力事務所、奈良市教育委員会 後援：奈良県、奈良市

セミナー開催案内のチラシ



奈良朱雀高校（小野以秋子さん）



畷傍高校（久保美智代さん）

めぐる最新の動向についても、わかりやすく丁寧に解説してくれます。

もちろん奈良の世界遺産のことも、大きな話題にあがります。郷土の文化財がもつ世界的な価値を、あらためて知る格好の機会にもなっています。

開催校
（奈良県立）生駒高校・奈良朱雀高校・青翔高校・西の京高校・法隆寺国際高校・香芝高校・五條高校・畷傍高校・高田高校・橿原高校（奈良市立）一条高校

開館100年を迎えた カンボジア国立博物館



表紙の写真：カンボジア国立博物館 正面玄関

文化遺産ワークショップ(4ページ参照)の会場になったカンボジア国立博物館は、伝統的なクメール建築を模して建てられた堂々とした意匠の博物館です。フランスによる保護国の時代(1863~1953年)の1917年に着工され、1920年4月13日(クメール暦の大晦日)に開館しました。今年2020年は、それからちょうど100年の記念の年にあたります。

当初は、インドシナ総督の名を採って、アルベール・サロー (Albert Sarraut) 博物館と呼ばれた時期もありましたが、1953年のカンボジア独立を経て、1966年から、現在のカンボジア国立博物館の名称が使われるようになりました。

先史時代(BC4200年頃~紀元前後)、前アンコール時代(紀元前後~AD802年)、アンコール時代(802~1431年)、後アンコール時代(1431~1863年)の各時代にわたる、世界有数のクメール文化遺産コレクションを所有する博物館として有名です。

ポル・ポト政権支配下の1975~79年には、閉館を余儀なくされ、コウモリの巣窟と化しましたが、1979年4月13日(またもクメール暦の大晦日)に再び開館して、今日に至っています。

2018年の入館者は、約310,000人。うち海外からの訪問者が3分の2を占める、外国人に人気のスポットになっています。アンコール遺跡群やサンボア・プレイ・クックなどの世界遺産めぐりにあわせて、立ち寄ってみてはいかがでしょうか (ACCUおすすめです)。



上：中庭(中央はジャヤヴァルマン7世像のレプリカ)
中：青銅鑄造品の展示室
下：アンコール期の石彫の展示室



公益財団法人 ユネスコ・アジア文化センター 文化遺産保護協力事務所

Cultural Heritage Protection Cooperation Office, Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO

〒630-8113 奈良市法蓮町 757(奈良県奈良総合庁舎1階)

- TEL 0742-20-5001
- FAX 0742-20-5701
- URL <http://www.nara.accu.or.jp>
- E-mail nara@accu.or.jp

交通アクセス

- 近鉄奈良駅から**
 - 徒歩約20分
 - バス13番のりばから「西大寺駅行き」または「航空自衛隊行き」で、佐保小学校下車すぐ
- JR 奈良駅から**
 - 徒歩約20分
 - バス西口15番のりばから「西大寺駅行き」または「航空自衛隊行き」で、佐保小学校下車すぐ